

哭
壁
上

丹
羽
文
雄
著

哭

壁

上

丹

羽

文

雄

講

談

社

上 壁 哭

昭和二十三年十一月廿五日印刷
昭和二十三年十二月五日發行

定價 三百圓

著 者 丹 羽 文 雄

發 行 者 尾 張 眞 之 介
東京都文京區常盤町三ノ一九

印 刷 者 赤 尾 豐
東京都文京區大塚坂下町一五五

印 刷 所 日新印刷株式會社
東京都文京區大塚坂下町一五五

發行所 株式會社 大日本雄辯會講談社
東京都文京區音羽町三ノ一九

日本自由出版協會會員
振替口座 電話 一三一番
東京三九三〇 九段(33)代表 一八六番

目次

第一部		三
-----	-------	---

第二部		104
-----	-------	-----

後記		三八
----	-------	----

哭

壁

—
上
—

第一部

壹

門口に椅子をもち出し、若い女が腰をかけてゐた。骨つぼくて、腺病質らしい。襟に濃く白粉をぬつてゐる。人絹のけげばしい柄の足を組んで、打水をした地面の一點を見つめてゐた。何やら懊惱が胃袋をしめつけてゐるらしく、虚心なのか、大分まへから同じ姿勢を崩さない。南條良平は、聲をかけたものであらうか、黙つて門口を通つてよいものか、しばらく女の前に立つてゐたが、これも挨拶といふ風にふるまひ、門口にはいつた。家の中は無人のやうにひっそりとしてゐた。たれかが急いで出ていつた後のやうであつた。彼は自分が無遠慮な男でないことをよく知つてゐた。聲をかけたものかどうか、再び迷つた。良平はゆつくりとかまちに腰をかけて、靴の紐をほどいた。二疊の玄關、飾窓の障子が破れてゐる。右手の廊下のつき當りが階段だつた。この家に來たのはただの一度である。

が、期待よりも皮膚が一度の経験を暗誦してゐた。帳場らしいのが左手にあつた。誰もゐない。一升壺が二本、人間のやうに部屋のまん中に立つてゐた。中身はないのである。晝間の暑氣が淀んでゐた。西に窓が開いてゐて、落日のかあつとした調子外れな明るさを搔き集めてゐる。動くものが何もない。へんに空虚である。ここでは時間の足もとまつてゐるらしい。良平はみしみしと鳴る薄い板の階段を上つた。目ざすは奥の八疊である。二階はどの部屋も明け放されてゐた。

八疊に女がひとり、向かふ向きになつて疊にぢかに寝てゐた。シュミーズ一つの大柄な肉體だつた。晝寢の延長であらうか。上半身は眞横になつてゐるが、下半分が睡りだらけて仰向けになりたがつてゐる。汗にまみれて、うす汚れたシュミーズであつた。良平はどきんとなつた。やはり逢へたと、胸の中をととのへるために息を吸ひこんだ。逢へる筈はないといふ確信をもつてゐた。どちらにころんでも、その場ではもつともな氣がするに違ひなかつた。足の下がへんに柔かい。

陽に焼けた疊の床が、ふくれ上つてゐる。良平は女の枕許に來ると、さうするつもりであつたやうに靜かにあぐらをかいた。眼の下にはいくらか蒼ざめてはゐるが、少女の肌に似た新鮮な感じの若々しい顔があつた。長くて細い眉が、べつたりとくつついてゐる。描いた眉だ。眉は半分ほど毛をつけてゐるが、黛の手前、生得の眉毛は邪魔な風だつた。良平の一年ぶりの感動は苦もなくすり變へられた。つまり、あの女ではなかつた。がっかりした。が安堵にも通ふ感情だつた。

めざす女と違つてゐたにしても、このまま引上げる氣にはならなかつた。何故か判らない。良平はあたりを見廻した。安物の床の軸、せまい床、粗末な天井、節の多い柱、廊下の手すりの側が傾斜してゐる。ブラックの程度だが、それでゐて相當年代は經つてゐるらしく、建具は古びてゐた。手すりの向かふは庭樹であつた。階下の座敷から眺めたならば、庭も一應木石はあんばいされてゐるのだらうが、二階になると、樹木はめいめいに枝葉を茂らせて、われがちに伸びてゐた。

このあたりには、この種の家が十數軒ある筈だつた。爆撃に忘られた町の一劃である。飛行場から一里のこの町の一劃は、晝間は兵が通ひ、夜になると女の格が上つて、士官の相手をつとめた。一年ぶりに良平は、焼失した町を歩いた。この一劃が果して残つてゐるであらうかと、それほど心だのみにして來たわけではなかつた。焼けてゐたならば、それまでである。ところが運強くこの一劃だけが以前の面影をとどめてゐると、足を入れた時、彼は何やら忌はしい蟲に心を刺されたやうな氣がした。引きかへすことは、絶對にならない。どうしても切りすてることの出来ない運命の汚點のやうであつた。汚點は記憶の中で絶えず緩慢に呟いてゐるらしく、それから顔をそむけることも、とぼけてみせることも出来なかつた。しかしいざその部屋で、それに似た女の枕許に坐つてみると、重苦しい負債の念が思ひすごしでないことがよく判つた。一年前の記憶は病床中も絶えず神經に障り、昂奮させ、不安を呼びおこしたものである。彼は煙草もすばずに、睡つ

てゐる女を眺めてゐた。自分のまはりにちつとたちこめてゐる沈黙が、白日夢のやうであつた。わづかな身振りでこの沈黙が破られるのを、彼はおそれた。

やがて女のからだが動いた。仰向けになつた。彼はばかりと開いた二つの眼を見た。その眼は枕許の人の氣配を感じて、動いた。色のない、無感動な、縁もゆかりもない人を眺めるやうな上目使ひだつた。その眼差をうけて、良平は眼を伏せようとしなければ、顔の位置を變へもしなかつた。やがて女の瞳に色が浮んだ。「だれ、あんたは？」女は兩手をうしろについて半身を起した、じろじろと眺めた。眼つきはいくらか驚いてゐる。

「ごらんのとほり復員者……」ほとんど囁くやうに應へたが、女が眠つてゐる時にくらべると彼の氣分は樂になつた。肩をすくめた。

女は暫く黙つてゐた。

「そんなにあたし、眠つてたのかしらね。すうつと前からそこにゐたの？　だら

しないわ。寝ばうね。呆れちやふわ」靜脈の見える白い腕をあげて、頭のうしろをかきながら、ふふんと女は言つた。

良平は煙草をとり出した。何となく氣樂に空氣が展けていく。

「たれもゐないの、階下に？」

煙草の函を差し出すと、女は一本を抜きとつた。

「門口に一人ゐたよ。白粉を塗つて……」

「みのるさんよ。あのひとの番だから。幾世さんの馴染？」

「何人ゐるんだ」

「あたしと三人よ」

「たしかにこの家だ。梅廻家だらう？」

「さうよ」

「そしてこの部屋だ」

「誰さ、馴染は？」

「紫こん」

「しこん？ しこんさんといふの？ をかしな名ね。一度も聞いたことないわ」

「一年前だ」

「それぢや戦争中ぢやないの。終戦後おかみさんも變つたわ。ポツダム宣言で、公娼はなくなつたのよ」

「ああ、さうだつてね」

「逢へると思つて來たの？」

「逢へないと思つて來た」

「をかしなひと」

「ほんたうに、をかしい」

をかしいとは何と調法な表現だらう。それ以外に妥當な言葉は見付からない。

矛盾といふのでは角が立ちすぎる。もつとあいまいな気分だった。女に逢ひたいといふのは、言はば夢うつつの妄想の如きものであつた。戀しいといふのではない。かつた。と言つて憎惡とも違ふ。憎惡といふほどはつきりとした心象ではない。はなはだをかしい気分である。自分で先づをかしいのだから、第三者に明瞭な印象をあたへないのも無理ではない。われながらこの氣持には合點がいかない。良平はにやにやとした。誘はれて女も苦笑した。

「一年も経つてから訪ねてくるなんて、よほどの馴染だつたのね」

「一度逢つたきりだ」

「一度？ ああ、さう、回数なんか問題ぢやないわ。感激があつたのね。紫こんさんて、どんなひと？」

「君のやうに大柄だつた。顔の印象は素人つぼくて、善良さうだつた。こんな世界の女らしくなく不思議なほど眞面目なところがあつたよ。だからあまり賣れな

かつたらしい。背が高く、よく整つた體格をしてゐた。口數の少ない女だつた。贅澤といふことには經驗がなくて、生れた時から質素の中だけに生きてきたやうな女だつた」

良平は意志に反したことを喋つてゐる氣がした。口を噤んだ。するとたちまち襲ひかからうと待ち伏せをしてゐたかのやうに、一年前のことが具象的に浮んできた。もつたいぶらずに、率直にふるまつた方がよろしい。彼の言ひたいことは他にあつた。

「自分は清無淨垢のままで死ぬつもりだつたんだよ。二十五六までの男は主義や思想のために簡単に死ぬるからね」ひきちぎつたやうな聲で言つた。「そのことに、大いに意義を見出してゐたんだ。ところが、そんなものは結局自分ひとりの思ひ上りにすぎないんだ。潔白に死んだところで、死がそれだけ格をつけるわけでもなかつたのさ。出發命令が下りると、自分は仲間誘はれて、ここに來たん